

令和4年度入学者選抜学力検査問題 前期日程
総合問題 正解・解答例

I

問1

精神的幸福度に関して、自殺率は平均より高く、生活満足度も平均を大きく下回ることから、日本の子どもの順位は最下位から2番目とかなり低い。対照的に、身体的健康に関して日本は最上位で、そのことは子どもの死亡率や肥満児の割合に表れている。学力・社会的スキルに関しては、基礎的な学力が高い一方、友達づくりに苦手意識を持つ子どもが多く、結果として日本の子どもは下位層に位置している。以上より、幸福度に関する日本の子どもの特徴として、精神的側面と身体的側面との間に大幅な不均衡が認められること、また、社会生活において友人関係を築くことの困難が幸福度に悪影響を与えていることを指摘することができる。(291字)

問2

【賛成】

ユニセフの調査が参照する諸データは、確かに、一国の子どもの精神状態や教育制度のありさまをある程度は客観的に反映するものである。しかし、身体的健康や学力においては上位に入る日本の子どもの総合的な幸福度が必ずしも高くないという結果がまさに示しているように、幸福度の測定において重要なのは精神的幸福度である。そして、これはまさに個々人のその時々「気の持ちよう」という主観的な状態を表したものにすぎない。人の気持ちは変わりやすく、客観的には同じ状況でもある人は幸福を感じるが別の人は不幸を感じることもある。以上より、幸福度調査は人々の一時的な心理状態を写し取る不確かなものでしかないといえる。(293字)

【反対】

「生活満足度」という指標に典型的なように、幸福は確かに各人の「気の持ちよう」という主観的な要素に影響を受ける。しかし、ユニセフの調査が参照する数々のデータは、一国の医療や教育のあり方がある程度は正確に映し出すものである。そして、多くの子どもが読み書きができず必要な医療措置が受けられないような状況はやはり誰が見ても不幸だといえるように、健康や教育に関する制度が充実しているかどうかは人々が幸福を感じるためのいわば客観的な条件をなしている。このように、幸福度調査は、人々が主観的に幸福を感じる諸条件がどれだけ整備されているかを客観的に測定するものであり、一定の意義を有すると考えられる。(293字)

II

問1

人はきわめて多様な存在である。また人々をとりまく社会環境や自然環境の多様性も非常に大きい。資料1が述べる通り、「機会の平等」が保証されたとしても、これらの多様性によって個々が達成する帰結は大きく異なり得るのである。たとえば教育面では、全ての人々が等しく学校で学ぶ機会を提供され、同水準の努力をしたとしても、生来的能力の違いによって各々が達成する帰結には大きな差異が生じるだろう。家庭環境の違いの影響は言うまでもなく、どの学校に通いどの教師が担任になるのかによっても達成し得る帰結は大きく異なるだろう。人間の多様性と同時に社会環境や自然環境の違いゆえに、「結果」には顕著な不平等が生じ得るのである。(298字)

問2

「何の平等か」という視点で日米を見ると、アメリカは「競争」を重視する一方、日本は異なる焦点変数、例えば「結果の平等」を重視する社会であると資料2から判断される。ただし「競争」の重視は「機会の平等」を求めることと同値であるとすれば、二つの社会の本質的な差異は「平等」を何に求めるのかという点にあると言える。日本では個々の生来的能力の差異によってもたらされる「結果」をそのまま受け入れることを良しとしない、という考え方が根強いのかもしれない。人間、そして社会・自然環境の多様性を考える限り「機会の平等」を保証するだけでは不十分であり、ゆえに「結果の平等」を重視するという考え方には一定の説得力がある。一方で「結果の平等」を求めれば、もはや平等に「競争」することの意義は失われ社会の非効率化が進む、という反論があり得よう。我々は常に「何の平等を求めるのか」を問い、社会の在り方を検討する必要があるのである。(400字)

III

問1

出来事とは、それを経験しなかった大多数の者たちにも理解可能な、人間的な共感を寄せることのできる普遍性を持つものであるが、これに対し〈出来事〉とは、それを経験しなかった者たちには想像できない暴力的な体験そのものを指しており、その途轍もない暴力性ゆえに経験しなかった者には理解できない点で区別されるから。(150字)

問2

〈出来事〉を物語化するとは、その途方もない暴力の巨大さゆえに考えるのを避けていた〈出来事〉を、すべて理解可能で、不安に陥れたり脅かしたりするものは何もない物語として、記憶の中に安定した居場所を見つけて、封印することである。そこには、例えば障がい者が、自らの人生が単純化されて安っぽい感動を誘う話にされたと抗議することがあるように、物語化によって体験が陳腐化されてしまうという問題が付きまとう。一方で、物語化によって、個人のトラウマが癒やされることがあるように、語り手は〈出来事〉を物語化することによって、体験に筋道を与え、新たに生きることが可能になるという効用がある。さらに、読者にとっては、物語化によって、理解不可能と思われた〈出来事〉が、共感をもって理解することが可能になるという効用がある。(347字)

IV

問1

家族に世話をしている人がいても、自身をヤングケアラーと認識していない中高生が多数いる。ヤングケアラーについて聞いたことがない人やよく知らない人が90%以上いることから、自分がやっていることが、単なる家事手伝いであるのか、ヤングケアラーに相当するのか判断できないことが理由の一つとして考えられる。また、周りの友人等もこれらの言葉を知らないため、周囲の人間から指摘される機会も少ないと思われる。(195字)

問2

本人や周囲の知識不足は共通しているが、市区町村では関係機関・団体の知識不足も課題としている。一方、学校では教員の対応や専門職の配置が不足していることを挙げている。市区町村は、関係機関・団体による対応を目指しているようだが、学校では、校内で対応できるようにすることを課題としているようである。このように対応すべき組織の認識の相違は、情報の管理や組織間の連携不足によってちぐはぐな対応となる恐れが生じる。(200字)

V

問1

構築主義とは日本文化を例にとれば、「自然との調和や共生を重んじている」「革新と伝統を融合している」など「日本人らしさ」の特徴を、その所与の本質と捉えることを拒否する。それはむしろこうした特徴を、他国の類似例との比較や国内における反対例の存在、それにまつわる地域・階層・世代間の差異、関連する言説の提唱者の意図等に留意し、そこに秘められた断片性や不完全性、文脈依存性の解明を目指す立場のことである。(198字)

問2

東日本大震災発生当時、多くの日本人が感情を抑え秩序を守ることに對して高い意識を示す行動をとった。「本質主義」はこれを日本文化・日本社会に固有の性質と考える立場である。一方で同じ日本人がサッカーワールドカップでの日本の勝利に対しては感情をあらわに行動しており、その姿は同じ状況における他国の人々より情熱的あるいは無秩序であることもあった。したがって「構築主義」の立場からは、日本人の感情表現も様々な状況に即して変わりうる相対的なものとして理解することが可能である。異文化圏の人々に日本文化を発信する際、「本質主義」に基づいて日本人の協調性を紹介し理解を得るのは効果的なアプローチである。それに対して「構築主義」に基づく発信は、協調性の裏返しとしての個性の欠如という認識や、日本人によるエスノセントリックな価値基準の押し付けを回避し、外国人の日本文化に対する多角的な理解を促す。このように異文化理解を進める上では、戦略的な「本質主義」に基づくアプローチを活用すると同時に、「構築主義」の視座を持つことが欠かせない。この二つのアプローチの併用は、自らが外国の文化を理解する上でも同様に必要であろう。(496字)